

8章 社会学的な都市祭礼・祝祭研究におけるシンボル分析論 —伝統概念を手がかりに—

伊藤 雅一

ITO Masakazu

1 都市祭礼・祝祭研究の分析視角

1.1 田中重好による都市祭礼研究

地域活動の中でも、祭りは開放性を特徴に挙げられる取り組みで、さまざまな主体が関係する場となっている（有末 2000）。社会学的には、都市祭礼・祝祭⁽¹⁾の分析が蓄積されてきた。田中重好は、過去の都市祭礼・祝祭研究をふまえた上で、祭りの特徴や都市祭礼を分析する視角をまとめている（田中 2007）。

はじめに田中は、さまざまな形態で行われている祭りに共通する構成要素として、「儀礼性」「瞠目性」「発散性」の3つの特徴を見出している（田中 2007: 73-81）。儀礼性は、祭りの儀式としての側面（神事）を指している。ただ、祭りは「神様のための祭り」から「人間のための祭り」へと歴史的な変遷を経ているため、儀礼性が明示的とは限らなくなっている。瞠目性は、祭りが「見せる」祭りへと特化していく中で強調されてきた注目を浴びる（目を^{みは}瞠る）側面を指している。発散性は、祭りのつくり出す非日常の時間や空間の側面を指している。非日常の時間や空間では、日常的な関係性や感情が発散する。田中は、都市祭礼において、この3つの要素が組み合わせられて成立していると捉えている。

次に、都市祭礼・祝祭の構成要素を確認した上で、田中は都市祭礼への分析視角／都市祭礼からの分析視角として、「資源動員論」「集合行動論」「シンボル分析論」の3つを挙げている（田中 2007:81-84）。

資源動員論は、祭りをさまざまな社会的資源が動員される過程として見る立場であり、社会的資源とは、人的資源・経済的資源・物的資源・技能的資源の4つを指す。各社会的資源を相互に、ある程度まで代替可能なものとするのが特徴で、社会的資源の動員原理や社会的文脈の探求が重要だとされている。この立場では「祭り＝社会運動」として捉え、田中の分析もこの立場から展開される。

2つ目の集合行動論は、祭りを緩やかに組織された群衆・集合行動として見る立場である。言い換えれば、祭りは非制度的な行動とされる。代表的な例として、松平誠の都市祝祭研究は、集合行動論の立場として読み取れる（松平 1990,2008）。松平は、「高円寺の阿波おどり」を事例に挙げつつ、都市祝祭が「伝統型」から「合衆型」へ変遷していくと述べている（松平 1990）。「合衆型」というのは、「不特定多数の人びとが、自分たちの自由意思で選択し、さまざまな縁につながって、ごく一時的に結びつく集合的な祝祭」（松平 1990:18）を指している。具体的には、「伝統型」が「スル」（運営）と「ミル」（観客）を分離させて

いたのに対し、「合衆型」では「ミル」が「スル」へと参加していくことを挙げている（松平 1990:348-351）。その後、松平は「YOSAKOI ソーラン祭り」を事例に「都市マツリ」は「都市イベント」へ変遷して「合衆型」よりも開放的になっていくと述べており、「スル」が「ミセル」（披露）へ、「スル」と「ミル」が相互に行きかうことを挙げている（松平 2008）。

3つ目のシンボル分析論は、祭りの中に文化的意味（生死、秩序、破壊など）を探る立場である。主に人類学や民俗学の立場から祭りを研究したものに多く見られる。祭りを「日本の儀礼文化」として分析した倉林正次（倉林 1975）や、宗教学の立場から祭りと儀礼の関係进行分析した柳川啓一（柳川 1987）などが挙げられる。社会学においては、有末賢が地域社会論における文化論や意味論を展開している（有末 1999）。

以上の祭りの特徴や分析視角を述べた上で、田中は資源動員論の立場から集合行動論を援用しつつ青森県の「三都市のネブタ祭り」について分析している（田中 2007:69-138）。分析を通して、諸集団のネットワークや「組織化された集団」と「組織化されていない集団」の2層構造を見出した（田中 2007:110-111）。こうした重層的に構成される集団が担い手となっている都市祭礼に対して、田中は「地域的な共同性の発現形態」「地域的な共同性を育む場」を見出している（田中 2007:138）。

つまり、田中は都市祭礼をコミュニティの生成過程（コムニタス）として捉えていると考えられる。都市祭礼・祝祭について都市コミュニティ論を参照しつつ論じた研究としては、宮崎県都城市の3つの祭りを分析した竹元秀樹の研究（竹元 2014）が最新の都市祝祭研究として挙げられる。竹元は、先に挙げた松平の都市祝祭論や、鈴木広の地方都市型コミュニティ論（鈴木 1978）を批判的に引き継ぐ形で都市祝祭の分析を展開している。田中の研究では「共同性」に重きを置く議論の展開が特徴である一方、竹元の研究は、都市祝祭を「自発的な地域活動」として「地域性」に重きを置いたことに特徴がある。

このように、都市祭礼・祝祭はコミュニティ論の文脈で取り上げられてきた。ただ、都市祭礼・祝祭は「共同性」や「地域性」を見出せるような人々の集まりをどのように形成しているのか、その求心性についてはよく分からない。そもそも、都市祭礼・祝祭は都市における代表性を満たしているのだろうか。代表性が薄ければ、都市祭礼・祝祭を分析しても都市構造など都市の全域的な側面への言及は足元から揺らいでしまう。この求心性と代表性に関する疑問を、田中によって提示されたが、あまり言及されていなかった「シンボル分析論」に依拠しつつ考察していきたい。

1.2 シンボル分析論による都市祭礼・祝祭研究の再考

シンボル分析論は、都市祭礼・祝祭を文化や意味として見なす立場である。都市における代表性に関連させて言えば、ある都市文化を代表する都市祭礼・祝祭であれば、都市の全域的な側面に言及することが出来るだろう。対象とする都市祭礼・祝祭が都市文化を代表しているかは、都市祭礼・祝祭への参加率や資源動員のネットワーク構造などを用いて

計量的・実証的に提示することも出来るだろうが、言説的には、対象とする都市祭礼・祝祭を都市文化のシンボルとして見なすことで代表性に関する疑問には触れずに済むと考えられる。これにより、ある都市の都市祭礼・祝祭を取り上げる際、都市祭礼・祝祭の代表性についてあまり説明がない場合は都市文化のシンボルとして対象の都市祭礼・祝祭を見なしていることが指摘できる^②。別の言い方をすれば、資源動員論や集合行動論という分析方法は、シンボル分析論の見方を前提としてもっているとも言えるだろう。

次に、都市祭礼・祝祭への求心性について見ていくと、対象とする都市祭礼・祝祭が都市文化のシンボルとして見出せる場合、求心性は自明なものとなる。また、都市祭礼・祝祭の特徴として、田中の挙げる矚目性を考慮すれば、注目を集める都市祭礼・祝祭それ自体に求心性があるとも指摘できる。しかし、どのように求心性を成立させているのか、という観点からは説明不足である。竹元は、有末賢の都市文化論、その分析視角としての象徴・意味論（有末 1999）を参照しており、シンボル分析論の視角を内包している。それは、当初の目的であった「駅前地域の再生」から「本物の祭り」を目指すように変遷した「おかげ祭り」を「伝統の創出」活動だと見出し、その活動の社会統合機能へ期待をしていることなどから確認できる（竹元 2014:233-236）。都市祭礼・祝祭の求心性は、祭礼・祝祭の目的が変遷していくことによって維持してきたと解釈でき、伝統のシンボルとしての都市祭礼・祝祭が継続されてきたと読み取れる。

シンボル分析論の立場から言えば、竹元の分析は、それまでは形骸化の一途をたどるとされてきた都市祭礼・祝祭の伝統的側面を「伝統の創出」活動として再提示したことに意義がある。次に「伝統の創出」について掘り下げてみたい。

2 「伝統の創出」をめぐる議論

2.1 歴史的事実からの分析

「伝統の創出」という言葉を聞いて見逃せないのは、エリック・ホブズボウムらによって歴史学的に論じられた伝統の「創出」にまつわる議論である（Hobsbawm and Ranger 1983=1992）。ホブズボウムは、伝統が長い年月を経たものと思われ、言われている一方で、実際は（その想定よりも）最近成立したもの、時には捏造されてきたものだと指摘する（Hobsbawm and Ranger 1983=1992:9）。その上で「創り出された伝統」を以下のように定義した。

通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によって総括される一連の慣習および、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀式的ないし象徴的特質。（Hobsbawm and Ranger 1983=1992:10）

つまり、特定の規則に従う慣習の連なり・特定の行為のもつ価値や規範の習得を期待される反復・歴史的なつじつまを合わせる儀式や象徴の3つの要素が「創り出された伝統」を構成している。なお、「慣習」は「実地的な融通性」による変化を特徴としているため、「恒常性」を特徴とする儀礼的行為の伝統と区別されている(Hobsbawm and Ranger 1983=1992:11)。

続けて、ホブズボウムは「伝統」はどのような時に創り出されるのかについても言及しており、旧来の伝統が案出された社会的様式の弱化や崩壊の時と、担い手の適応力や柔軟性が失われる時を挙げている。その上で、「創り出された伝統」を互いに重なり合う3つの類型にまとめた。

- (a) 集団、つまり本当のないし人工的共同体の社会的結合ないし帰属意識を確立するか象徴化するもの
- (b) 権威の制度ないし地位、権威の関係を確立するか正統化するもの
- (c) 社会化、つまり信仰や価値体系や行為の因襲性を説諭するのを主な目的とするもの

(Hobsbawm and Ranger 1983=1992:20)

(a) は「共同体」やそれを表現象徴する諸制度との同一感に内在しているもの、つまりは広く普及しているとされている。その一方、(b) と (c) は案出されたものとされている。

ここで、都市祭礼・祝祭研究の議論へと少し振り返る。田中が都市祭礼に見出した「地域的な共同性を育む場」は、「反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もう」とする「創り出された伝統」の要素を表していると考えられる。言い換えれば、都市祭礼という行為における価値や規範を「地域的な共同性」という言葉で説明していると考えられる。竹元は、都市祝祭という行為を「伝統の創出」活動であることを見出して、共同性や地域性を「伝統」と関連づけた。これは、都市祭礼・祝祭という行為における価値や規範を「地域的な共同性」から「伝統の創出」へと具体化したと解釈することが出来る。こうした竹元の知見は、鈴木広の「コミュニティ・モラル(士気意識)」と「コミュニティ・ノルム(規範意識)」から成る「コミュニティ意識論」に依拠し、「コミュニティ意識論」を「規範論」・「政策論」として捉え直し、現代の変容に対応した論を展開した上で見出されたものである(竹元 2014:5-7)。そのため、竹元の「伝統の創出」は、ホブズボウムの論じた「創り出された伝統」の3類型を包含している。コミュニティの議論は (a)、「政策論」や「規範論」の議論は (b)、都市祝祭の議論は (c) にそれぞれ呼応していると考えられる⁽³⁾。

都市祭礼・祝祭研究と「伝統」の関連性の高さを確認した上で、伝統を社会学的な視点から分析しているアンソニー・ギデンズの議論を次に参照していく。

2.2 伝統の意図や機能への社会学的な視野からの分析

ギデنزらは、伝統について近代(モダニティ)と関連させる中で論じている(Giddens 1994=1997、1999=2001)。「モダニティは、近現代社会の歴史のほとんどを通じて、一方で伝統を解消しながら、伝統をつくり直してきた」(Giddens 1994=1997:106)という認識から議論を始めている。別の言い方を挙げれば、啓蒙主義者たちが「近代の裏返し」で容易に払いのけられると考えていた伝統に注目し、「伝統という観念が人知に備わったことが、近代のはじまりの証にほかならない」(Giddens 1999=2001:84)との主張が挙げられる。ギデنزらが伝統を「つくり直し」の対象として考えることは、先に挙げたホブズボムの伝統認識と同様と言える。ただ、「伝統という観念」を「近代のはじまり」として解釈することは「伝統」を社会学的な視野から論じていることの表れとして捉えられる。

以上の伝統にまつわる前提を述べた後、ギデنزらは伝統の特徴として、儀礼性と反復性を挙げている。クン族の儀礼的交流形態を例示した上で、伝統は儀礼と関係しており、社会的連帯性と密接に結びついていることを述べる。併せて、伝統の示す行動様式は人びとを機械的に従わせるようなものではないことも付記する。そして、伝統のもつ機能についての説明(近現代の時代特性の引き立て役であること)と、反復性についての説明(持続性を想定している《何か》への着目)が必要であることを導出する(Giddens 1994=1997:115-119)。

儀礼性や反復性の説明をするべく、ギデنزらの定義では、伝統は以下の5つの要素から説明されている(Giddens 1994=1997:119-140)。

①「集合的記憶」との関連

ギデنزらは、記憶も伝統と同様に、現在との関連で過去を秩序づけていくことに関係していると考え、アルヴァックスの「集合的記憶」の議論を引用する。過去は、現在という基盤をもとに再構成されていくというアルヴァックスの議論を受けて、ギデنزらは以下のようにまとめる。

記憶とは、能動的な社会過程であり、その過程をたんに覚えたことからの想起と同一視することはできない。われわれは、過去の出来事なり状態について記憶を絶えず再生産しており、したがって、こうした繰り返しは経験に連続性を与えていく

(Giddens 1994=1997:120)

そして、「伝統とは、《集合的記憶を組成する媒体》であると言うこともでき」ることを見出した。

②儀礼

「儀礼は、伝統の維持を確保するための実践的手段」であり、「儀礼は、過去の連続的再構成を人びとの実際の行いにしっかりと結びつけていくし、またそうするものと見なすことができる」と述べている。また、儀礼には「外示的意味」を欠く側面があることから日常と切り離す「隔離作用」があることも指摘している。

③「定式的真理」

儀礼の解釈は、一般の人びとには委ねられないが何らかの真理は想定されている。その真理と、真理を規定する「守護者」との存在によって規定されるのが「定式的真理」だという。真理の判断基準は、儀礼によって起こる出来事にあり、(出来事以前の)「守護者」の主張内容でないとされる。

④「守護者」の存在

伝統的秩序における「身分」であり、部外者には「秘儀」を伝えられない点で、現在の専門家とは異なるという。

⑤道徳内容と感情内容とが一体化した拘束力

伝統における道徳性は、過去と伝統とが一直線に並ぶような解釈過程と密接に結びついているものだとしている。伝統における感情は、神経症としての反復行動(嗜癖)を例示しつつ述べた「衝動脅迫性」(過去から脱却できないこと)の整合性をもたせたものと読み取れる。過去との関係を秩序立てる伝統のもつ道徳と感情をまとめ上げる力。

ギデنزは、伝統の5つの要素を論じた上で、「状況依存的存在」としての伝統の様相を以下のようにまとめる。

伝統は、儀礼と定式的真理とが一体化したものによってその存在を保証されてきたという意味で、状況依存的である。伝統は、かりにこれらのものから切り離されてしまえば、慣習や習慣に陥ってしまう。伝統は、守護者なしには考えられない。なぜなら、守護者は真理に接近する特権を有し、また真理は、守護者によって解釈や実践のなかにはっきりと示されていかない限り、証明され得ないからである。

(Giddens 1994=1997:150)

状況依存的存在としての伝統は、伝統を維持するための排他性がある一方、アイデンティティを定置してくれるなどの安定性ももたらしていた。しかし、近代の初期において伝統は近代化と連携していたものの(Giddens 1994=1997:172-178)、「グローバル化」の流

れに影響され「脱伝統遵守」へと向かっており、伝統は存続の危機を迎えている。

そんな社会状況の中、近現代世界における伝統の存続が見られるのは、理路整然と明確化され擁護されている場合か、原理主義（ファンダメンタリズム）に基づく場合かの2通りだと述べる（Giddens 1994=1997:187-188）。ギデنزの関心としては、前者に重きがあると考えられ、「伝統が生きながらえるためには、内輪の儀式による正当化ではなく、説得力のある一他の伝統、他のものごとの処し方と比較対照させての一正当化が欠かせない」と述べている（Giddens 1999=2001:95）。また、「儀式、式典、それらのくりかえしが、重要な社会的役割をになうことを、ほとんどの組織、なかんずく政府はよくわきまえているし、また、必要に応じて政府が儀式を主催したりもする」と述べており、人間生活に連続性を与え、その様式を定めるのが伝統であるから、「伝統の存在は社会を存立させるための必要条件である」とまで明確に主張している（Giddens 1999=2001:93-95）。後者の原理主義については、ギデنز自身あまり深い言及はしていないが、「包囲された伝統」であるとし、グローバル化の社会状況において疑問を呈される存在だとしている。ただ、原理主義のもつ基本的な問い「聖なるものが存在しない世界に、私たちは住まうことができるのか」については、意識を向けるべきだと言及している（Giddens 1999=2001:102-105）。

先に述べたように、ホブズボウムの「創り出された伝統」の議論から、都市祭礼・祝祭研究と「伝統」の関連性が高いと見出せた。次に、ギデنزの伝統をめぐる議論を受けて、都市祭礼・祝祭研究について考察していきたい。

3 都市祭礼・祝祭研究と「伝統の創出」

ギデنزの伝統をめぐる議論を参照すると、祭りの特徴は、田中の挙げた3つ（儀礼性・瞻目性・発散性）に加えて、「反復性」を挙げることができると考えられる。多くの祭りは、決まった周期で決まった時期に開催される。「反復性」は時間の秩序を生み出す規範性が見出せる上、ギデنزの定義①「集合的記憶」との関連（現在との関連で過去を秩序付けていく、「記憶を絶えず再生産して」いく）が指摘できる。ギデنزの伝統の定義に瞻目性や発散性といった特徴を見出すことは出来ないが、祭りの特徴として「儀礼性」と「反復性」が挙げられることは、祭りの側から伝統へと接続していく契機—つまりは「伝統の創出」の契機—を見出せる。

次に、田中の提示した都市祭礼・祝祭研究における3つの分析視角と照らして考えていくと、ギデنزの定義③「定式的真理」とギデنزの定義④「守護者」が関わってくる。まず「定式的真理」の存在から、対象を「非制度的な行動」とみなす「集合行動論」は適していないと考えられる。「守護者」を伝統における構成員とみなし、また「真理」を司る「秘儀」などを有している技能者ともみなせる場合、「資源動員論」によって「社会的資源」（人的資源・経済的資源・物的資源・技能的資源）に注目していくことが想定できる。し

かし、「守護者」は「社会的資源」のように代替可能なものではない。田中の提示した都市祭礼・祝祭研究における3つの分析視角の中では、ギデنزの伝統の定義に基づく伝統を分析できるのは「シンボル分析論」のみとなる。ギデنزは以下のように述べる。

かりに「近現代社会は、どのようにして脱伝統遵守をとげてきたのか」を問うとすれば、その答えをだす最も明白な手段は、特定の種類の象徴や儀礼を観察して、それらがどの程度まで依然「伝統」を形成しているかを考察することである

(Giddens 1994=1997:125)

現代において伝統を分析することは、「脱伝統遵守」を対象とすることでもある。ギデنزが伝統の分析に「シンボル分析論」を採用していることから、「伝統の創出」を見出せる都市祭礼・祝祭に対しては、「シンボル分析論」による分析が有効であることを見出せる。伝統社会における祭りは、代表性も求心性も自明のものとして問われることはなかった。しかし、「脱伝統遵守」が進む現代においては、ギデنزの述べるように祭りの「正当化」を絶えず問われ続けることになっている。竹元の分析した「おかげ祭り」が目的を変えつつ継続されたことは、祭りを続ける上での「正当化」の変遷（それによる祭りの求心性の維持）と解釈することも出来るだろう。

ただし、祭りを続ける上での「正当化」を維持していくのは容易ではない。玉野和志は、都市化の過程で流入・定着した都市自営業者層の二代目が中心となって創設し、担い手となった「二社祭り」について詳細に描いている（玉野 1999,2005:69-116）。1度は町会によって「封印」された神輿が、1970年代後半に商店街組織の世代交代を機として復興されていくことから、1970年代以降を「この町で住民が世代的に再生産される見込みが初めて現れた」時代と述べている（玉野 2005:115）。だが、玉野は先の論に続けて1980年代以降の都市再開発によって「世代的な再生産」が続いていかないことに言及している（玉野 1999:38,2005:115-116）。「神輿」という明確なシンボルが存在し、「世代的に再生産される見込み」が見出せていても—ギデنز風に言えば「記憶を絶えず再生産」していても—社会状況や社会層の入れ替わりの影響を受けて「正当化」は機能しなることも少なくない。それだからこそ、都市祭礼・祝祭の継続や「伝統の創出」を見出せることに注目する意味があるとも言える。

4 おわりに

本稿では、都市祭礼・祝祭研究における「シンボル分析論」の位置について、伝統概念を参照しつつ考察してきた。まず、「シンボル分析論」は都市祭礼・祝祭研究の前提に位置するのではないかという提起を導出した。その後、伝統概念を参照していく中で、祭りの

特徴として「反復性」の追加、「伝統の創出」を見出せる都市祭礼・祝祭には「シンボル分析論」が有効と考えられることに至った。有末は、井上俊が地域文化の多様性を3つのレベルを挙げていることに着目する。3つのレベルとは、第一に「地域社会をふくむ全体社会の文化の相違に由来する多様性」、第二に「全体社会の文化の内部における地域ごとの多様性」、第三に「地域文化の内部における多様性」の3つである（有末 1999:58-59）。都市祭礼・祝祭を文化や意味と見なす「シンボル分析論」によっても、都市構造の重層性など対象地域の全域的なレベルの言及が可能であると言える。

桑江友博は、都市祭礼・祝祭研究を網羅的にまとめた議論の最後に、「都市祝祭」が存在し続けることを疑問視する。「祝祭性」が広範に流布し、「祝祭の日常化」が多くの論者によって指摘されている一方、「都市祝祭」が数多く存在し、新たに作り出され、消費されているのかと（桑江 2009:113）。その疑問の一部は、都市祭礼・祝祭と伝統の関連から答えることができるだろう。ある時代には、「創り出された伝統」の一形態として意図的に生み出され、現代においては「人間生活に連続性」を与え、「社会の存立」に必要とされる伝統の一形態として絶えず正当化の一対象となっているのが都市祭礼・祝祭なのである。

ギデنزは、グローバル・コスモポリタン社会が実現する時は、「伝統の終焉」を迎える時だと述べている。しかし、その終焉とは、「姿かたちを変えた伝統が、そこかしこに繁茂しつづける社会の到来」であると付記している（Giddens 1999=2001:91）。竹元の見出した「伝統の創出」活動としての都市祝祭は、「姿かたちを変えた伝統」なのかもしれない。

ただ、そうした「正当化」を問われ続けることで維持される伝統、言わば「再帰的伝統」としての都市祭礼・祝祭は、都市の祭礼・祝祭なのであろうか。コミュニティのシンボルとしての祭礼・祝祭、かつ、祭礼・祝祭のシンボルとしてのコミュニティという関係が見出せる時、「都市」という枠組みがゆらぐのではないだろうか。これらの疑問は今後の課題としたい。

注

(1) 都市の祭りを指す用語として、主に社会学では「都市祭礼」と「都市祝祭」が主に用いられてきた。田中は都市祭礼、松平と、松平の論を引き継ぐ竹元は都市祝祭（祝祭活動）と表記している。本稿では、それぞれ論者に合わせて表記しつつ、包括的な文脈では「都市祭礼・祝祭」と表記する。本稿においては、祭礼と祝祭の差異は議論上あまり影響がないと思われる。

(2) 都市祭礼研究の中でも、対象とする都市祭礼の都市における代表性が問われない研究については代表性の議論自体があまり意味のないことである場合もある。ただ、社会学における都市祭礼研究の大半が、都市構造や社会構造といった都市や社会の全域に関わる論理展開を行っている。そうした全域的な視野を議論するためには、代表性について言及する必要があると考えられる。

(3) 更に付記すれば、竹元は社会の個人化が進行して「帰属のゆらぎ」が生じている社会背景をベースに議論を進めており、3類型の中でも特に (a) と呼応している。

参考文献

- 有末賢,1999『現代大都市の重層的構造』ミネルヴァ書房
——,2000「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」日本生活学会編著『生活学第二十四冊 祝祭の一〇〇年』ドメス出版
- 倉林正次,1975『祭りの構造』日本放送出版協会
- 桑江友博,2009『都市祝祭祭礼研究・再考』武蔵大学総合研究所紀要(19) 95-115
- Giddens, Anthony, 1994, "Living in a Post-Traditional Society" Beck, Ulrich, Anthony Giddens, and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』而立書房)
- Giddens, Anthony, 1999, *Runaway World*, London: Profile Books, Ltd. (=2001,佐和隆光訳『暴走する世界』ダイヤモンド社)
- Hobsbawm, Eric and Terence Ranger (eds), 1983, *The Invention of Tradition*, the University of Cambridge Press. (=1992,前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店)
- 松平誠,1990『都市祝祭の社会学』有斐閣
——,2008『祭のゆくえ—都市祝祭新論』中央公論新社
- 鈴木広編,1978『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会
- 竹元秀樹,2014『祭りとは地方都市—都市コミュニティ論の再興』新曜社
- 玉野和志, 1999「都市祭礼の復興とその担い手層—「小山両社祭」を事例として」東京市政調査会『都市問題』90(8):25-38
——、2005『東京のローカル・コミュニティ—ある町の物語一九〇〇-八〇』東京大学出版会.
- 田中重好,2007『共同性の地域社会学—祭り・雪処理・交通・災害』ハーベスト社
- 柳川啓一,1987『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房